

沢村貞子著「わたしの脇役人生」新潮文庫 1987年4月10日刊を読む(2)

稽古の意味

1. テレビ局の製作発表の席で、抜擢されたニューフェイスが挨拶する番になった。大きい瞳を輝かし、きれいな頬を上気させて、
「自分の可能性を試してみたいと思います。今度の役で、私は勝負します。よろしくお願ひ致します」
2. 透きとおるような高い声で訴える可憐さに、思わず手を叩く人が多かったけれど一老脇役は心の中でひそかに思ったものだった。
(それはちょっと無理よお嬢さん。天才は別として、普通の俳優は、いろんな努力を積み重ねたあげくでなければ、可能性なんてもてないのよ。稽古はしなけりゃいけないけれど、勝負はしなくていいんですよ、お相撲さんとは違うのだからね……)
3. そう言えば、蔵前から両国に移った大相撲の夏場所は、「花のサンパチ」とよばれる、昭和38年生れの若ものたちの烈しい勝負が、観客を十分に楽しませてくれた。
4. それにしても、この人たちの稽古の凄まじさはどうだろう。NHK特集「燃えるサンパチ……」の一場面—稽古場の砂にまみれながら、横綱・千代の富士関の胸をかりてぶつかってゆく保志関には眼を見張った。転がされても突きとばされても、息もつかずに飛びかかってゆく—何回も何十回も……。
5. とうとう動けなくなった身体を引きずるように隅の水場へ這っていったが、どうやら吐いているようだった。あげくに柄杓に汲んだ水は、じっと見ている親方へ、次は横綱へ—そして、自分のはのみもしないで、また、ほかの力士へぶつかっていった。
6. 「たいへんな稽古ですねえ」
見ていた人が思わず声をかけると、若い関取はケロッとして答えた。
「稽古しなけりゃ、どんどん落っこっちゃうからね」
7. 楽をしていては、いまの地位がたもてないということである。ピチピチした身体に闘志満々—小気味のいい相撲をとるけれど、力士としては大きい方ではない。三役に定着するためには、ただひたすら、稽古をつむよりほかはない、というわけなのだろう。彼はそれから間もなく優勝し、とうとう大関の座を勝ちとった。

P74～75

[コメント]

大相撲の力士たちは何のために稽古をするのか。その意味がよくわかる文章。プロとしての力を維持、向上させる気迫が伝わってくる。